

碁子

幣又はたづさへたる懷中將碁を取出して盤の紙を芝のうへにおしひらけば、塵兵衛もむかひ合たがひにならぶる駒の數、碁の小石と貝殻は、歩の不足とぞ見えにける。

〔書言字考節用集七〕碁七子七將碁七駒七俗用七

〔毛吹草三〕攝津 將碁馬

〔將碁口傳書〕駒ハ黄楊ニカギルベシ

〔日本風土記五〕碁格 碁子造法

碁子造製、上尖圓、下平方、乃天圓地方之象、上薄下厚、乃天清地濁之形、碁勢將勝、亦云將軍之聲、俱手執歩兵、雖已陞金將之名、與玉將相征、止得將點行、不敢揚稱將軍之聲、亦不敢衝其將軍之鋒、如兵卒得其功次、雖叨其銜祿、舉其力而不敢恃其威也。

〔麒麟抄七〕一將碁馬書事

眞ニモ書行眞ニモ、細堅クユラメキテ可書造馬ノ半上鮮々ト四角點行眞ニ緩々ト可書成、金ヲバ極草可書臺ニ入テ持手ニ可書、

〔雍州府志七〕將碁盤 於二條東或京極造之、以榧木製之、馬亦然也、其所用之簡是稱馬、大凡樗蒲之賽、總稱馬者也、至其文字、則擇堪筆法之人、而使記馬名、近世所用之馬、多有水無瀨家之筆跡、始水無瀨家兼成卿無男子、養高倉藤大納言永家卿子、號親具朝臣、子時兼成產實子、成長後號氏成、於是親具辭家督、剃髮號一齋、頗有能書之名、豐臣秀次公、使一齋書將碁馬名、是水無瀨家書馬名之始也。

〔群書一覽六〕將碁駒之記寫本 一卷

水無瀨兼成

將碁馬の銘の事、筆法に堪たる人、これを書云々、

〔長春隨筆上〕一世に傳ふ、象戲駒の銘は、水無瀨家の筆を以て寶とす、此筆跡の駒を以此手段を免許なきもの弄すべからずと云へり、